

開かれた共同体と優しさの行方

—キリスト教平和主義の視点を中心にして— (上)

川上周三

Open Community and the Future of Kindness : Chiefly from the Viewpoint of Christian Pacifism (First)

要旨：本論文では、人類が国民国家間の葛藤を乗り越え、相互理解と相互協力に基づく開かれた優しさの共同体を構築することは如何にして可能であるのかという問いを立てている。

次に、本論文の論文構成の論理の流れを概観してみよう。1章の序では、この論文の目的と全体の論文構成について述べている。2章の世俗逃避的キリスト教平和主義では、世俗を避け、平和主義と相互扶助愛を実践しているプロテスタント宗派のアーミッシュとフッターライトを取り上げ、その共同体活動について論究している。これらの世俗逃避的共同体では、その共同体作りの理念を貫きやすいが、反面、外に対して閉鎖的な側面を持っている。3章では、この閉鎖性を克服し広げていくための試みとして、ガンジーの非暴力の農村連合政府構想と柳田国男の相互扶助精神に基づく協同組合的農村連合国家構想について論じている。4章の世俗内的キリスト教平和主義では、この開放性を更に進展させていく試みとして、プロテスタント宗派のクエーカーの開かれた共同体作りとその超国家主義的国連思想・ピューリタン系譜の思想家、賀川豊彦の世界協同組合思想と同じくピューリタン系譜の思想家、マックス・ヴェーバーの対外的農業政策思想と国際政治社会学的思想について論究している。5章では、この論文のまとめと現代の平和についての傾向性と今後の展望について述べ、その論述の結びとしている。本稿では、4章のクエーカーの箇所までを論じている。

キーワード：開放性、協同組合、相互扶助、地政学、平和主義

1. 序

本論文では、国際平和というグローバルな視点に立脚して、人類が国民国家間の葛藤を乗り越え、相互理解と和解に基づく開かれた優しさの共同体を構築することは如何にして可能であるのかという問いを立てている。

本論は、この問いに接近するための一試論である。本論文では、この問いに答えるため、世俗逃避的キリスト教平和主義論・ガンジーの非暴力国家思想論と柳田国男の協同組合思想論・世俗内的キリスト教平和主義論という課題を設定した。

本論文では、この課題設定に沿って、1章の序で、この論文の目的と全体の論文構成について述べ、2章で、世俗逃避的キリスト教平和主義について論じ、3章で、ガンジーの非暴力国家思想と柳田国男の協同組合思想についての論を展開し、4章で、世俗内的キリスト教平和主義について述べて、その論をさらに進展させ、5章の結びで、この論文のまとめと今後の展望について述べ、この論攷を擧筆している。

次に、本論文の論文構成の論理の流れを概観してみよう。2章の世俗逃避的キリスト教平和主義では、世俗を避け、平和主義と相互扶助愛を実践しているプロテスタント宗派のアーミッシュとフッターライトを取り上げ、その共同体活動について論究している。これらの共同体では、世俗を避ける事により、その共同体作りの理念を貫きやすいが、反面、外に対して閉鎖的な側面を持って

いる。3章では、この閉鎖性を克服し広げていくための試みとして、ガンジーの非暴力国家思想である農村連合政府構想と柳田国男の相互扶助精神に立脚した協同組合的農村連合国家構想について論じている。4章の世俗内的キリスト教平和主義では、この開放性を更に進展させていくための試みとして、プロテスタント宗派の一派であるクエーカーの開かれた共同体作りとその超国家主義的国連思想・ピューリタン系譜の思想家である賀川豊彦の世界協同組合思想・同じくピューリタン系譜の思想家であるマックス・ヴェーバーの対外的農業政策思想と国際政治社会学的思想について論究している。5章では、これまで論じてきたことをまとめ、これに加えて、現代の平和についての傾向性と今後の展望について述べ、その論述の結びとしている。

本論文では、文献データ・聞き取り調査データ・参与観察データ・インターネット検索データにより、その情報を収集している。方法としては、マックス・ヴェーバーの理解社会学の視点に立脚し、比較法と歴史法と社会学を統合した比較歴史社会学的方法を採用している。

では、以下、本論文について具体的に述べていこう。

2. 世俗逃避的キリスト教平和主義論

キリスト教平和主義を掲げる宗派の中で、本章では、世俗逃避的キリスト教平和主義の共同体であるアーミッシュとフッターライトの共同体について論じることにする。先ず最初に、アーミッシュについて見ていこう。

（1）アーミッシュ

2006年10月2日に、アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州ランカスター地方のニッケル・マインズ地区にあるアーミッシュの学校が襲撃され、アーミッシュの児童達が銃撃によって殺されたり、重傷を負ったりした。銃撃犯人はアーミッシュの近隣に住んでいる住民であった。犯人は、児童を銃撃した後、自分が持っていたその銃で自らを撃ち、自殺したのである。この事件後、アーミッシュは、犯人を赦し、残された犯人の家族をサポートしたのである。銃撃事件そのものよりも、このアーミッシュの赦しの出来事の方が、アメリカ社会に衝撃を与え、マスコミにより大々的に取り上げられることになったのである。キリスト教平和主義を信条としているアーミッシュは、新約聖書で赦しの教えが説かれており、その教えを実践したのであると主張している。ニッケル・マインズの赦しとして知られているアーミッシュのこの実践活動は、どのような背景から生まれてきたのであろうか。

ここでは、この背景説明を行うために、ランカスター地方のアーミッシュの歴史や思想とその社会生活について見てみることにしよう。

先ずその歴史と思想について論じてみよう。アーミッシュは、16世紀ヨーロッパにおいて、自覚的な信仰を強調し、教会とは、イエスの教えに献身的に従う人々の集まりであると主張した再洗礼派の一派である。彼らは、これまで教会で受けた幼児洗礼は、自覚的なものではないので、これを否定し、自覚的な信仰を持った後、再度洗礼を受けるべきであると主張し、自覚的な成人洗礼を行ったので、この名前がつけられたのである。再洗礼派のこの思想は、幼児洗礼を認めるカトリックやプロテスタントの双方から、自らの権威を傷つけるものとして受け止められ、異端として排斥されるようになる。この思想は、宗教的恐怖を利用して人民を統制していた官憲の怒りも買うことになった。あらゆる方面から糾弾された再洗礼派は、その信念故に投獄されたり、処刑されたりしたのである。アーミッシュは、平和主義の教会を信条とするオランダの再洗礼派指導者メノー・シモンズをルーツとするメノナイト派の分派である。彼らの指導者であるヤーコブ・アマンの名にちなみ、彼らは、アーミッシュと呼ばれるようになった。ヤーコブ・アマンは、スイスと東フランスの再洗礼派が、社会的な受容を求めすぎるのを憂えていた。世俗受容は危険な誘惑であり、世俗を避けることこそが大切であると考えていた。現今では、メノナイトの多くは、高等教育・職業探求・都市や

都市近郊の生活と調和させる道を志向するようになった。これに対し、アーミッシュは、農村地域にとどまり、彼らがオールド・オーダーと呼ぶ生活様式により、17、8世紀の西欧の伝統的習慣を守ることで、彼ら流の思想を体現する道を選んだのである。理不尽な苦難に遭ったとき、彼らが取る態度は、敵を愛し、我が身を守ることを拒んだイエスに倣うことである。イエスに従うことを重視するアーミッシュは、マタイ伝第5章の山上の説教をとりわけその範としている。そこでは、赦しの教えが語られている。罪は7回まで赦せばよいかと問う使徒ペテロに対し、マタイ伝第18章第21-22節では、7の70倍まで赦しなさいとイエスは答えている。マタイ伝第18章第35節では、「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、私の天の父もあなたがたに同じようになさるであらう。」と述べられている。また、マタイ伝第6章第14-15節には、「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなた方の父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」と述べられている。赦す心を持つものだけが赦されるのである。（『アーミッシュの赦し』、114-117頁、140-146頁、153-159頁参照。）アーミッシュには、この赦しの教えがあるので、ニッケル・マインズの事件の犯人を赦し、その家族を支援しているのである。特に、犯人の家族を支援しているその実践活動の中に、心から赦そうとしている態度が滲み出ているのである。家族を殺されたアーミッシュに心の葛藤がないわけではない。しかし、その葛藤を乗り越えて、その赦しを実践しているのである。赦しに効用がないわけではない。復讐は、それを行うものの心に憎悪や恨みや憤りの否定的感情を増殖させるが、赦しは、それを行うものの心に反ってすがすがしい肯定的感情を残すからである。赦しは、それを与えるものを癒す面も持っているのである。また、赦しは、銃撃事件によってほころびの入った社会を修復する面も持っているのである。アーミッシュにとって、赦しは、被害者の家族だけではなく、アーミッシュの共同体全体の課題なのである。彼らは、アメリカ個人主義社会の中で、それとは反対に、異質な集団主義を維持しているのである。事件の犯人とその家族に対する赦しは、アーミッシュの共同体全体の赦しなのである。事実、犯人家族に対する支援活動やその資金は、アーミッシュ全体で行われているのである。彼らは、赦しの辛苦も皆で助け合えば軽くなることを良く知っているのである。ここに、アーミッシュ共同体における相互扶助の精神が良く現れているの

である。(『アーミッシュの赦し』、189-220頁、275-281頁参照。)

次に、アーミッシュの社会生活について見てみよう。アーミッシュは、1700年代半ばから1800年代にかけて、北米に移住し、ペンシルヴェニア、オハイオ、インディアナ各州等に入植した。19世紀後半になると、アーミッシュは、産業革命、大量消費社会の到来といった変化の対応に苦慮した。この時期、一部のアーミッシュがメノナイトのグループに合流している。これに対し、昔ながらの慣習を崩さなかったアーミッシュは、やがてオールド・オーダーズと呼ばれるようになった。このオールド・オーダーズは、自動車や高等教育や現代的な服装を拒否し、17、8世紀の西欧の生活様式を守っているのである。ランカスター地方のアーミッシュは、このオールド・オーダーズに属しているのである。

アーミッシュの社会の基本単位は拡大家族である。一人のアーミッシュにいとこが75人いたり、老夫婦は55人以上の孫がいることは珍しくない。アーミッシュの男女は古くから明確に決められている性役割に従う。家族の中では夫が宗教指導者とされている。妻は一般に家事と育児に専念する。幼い子どものいる母親が家の外に働きに出ることはほとんどないが、一部の母親は自宅に設けられた店舗や温室、パン屋で働いている。ほとんどの女性は家庭内の意思決定や子どものしつけも分担するが、宗教的な長は男性であることを認めている。

アーミッシュ社会は自治を任されている各地の教区から構成されている。道路や小川を地理的な境界とし、25世帯から40世帯が集まってできる教区は彼らの社会的・宗教的拠点である。アーミッシュは教会の建物を持たない代わりに、隔週の日曜日教区民の自宅に回り持ちで集まって礼拝を行う。密着して暮らしているため、日常生活でも直接的な交流が盛んに行われている。

各教区 (Distrikt, Dale) にはそれぞれ男性の指導者達がいて、通常それは一人の監督 (Bischoff, Völliger Dienst)、一人の牧師 (Diener zum Buch) 及び一人の執事 (Deakon, Armen Diener) である。彼らはいくじ引きで選出されている。監督は地区を統括し、それを牧師達が助ける。執事は相互扶助の調整に当たり、教区民の間で高額医療費をどう分担するかを決める。これらの指導者の中には公式に神学を修めた者はいない。資格要件で最も大事なことはアーミッシュの生活様式を一貫して守ってきたことである。教会の職務は終生のものであるが、報酬はないため別の仕事で生計を支えなければならない。

教区が集まってできる地域は<居住区>と呼ばれる。

居住区には教区が1つきりのものから100以上の教区を要する大きなものまである。オハイオ州ホームズ群は、ざっと200の教区が集まる最大の居住区の中心である。ランカスター居住区は北米アーミッシュの居住区としては最古の歴史を持つ。ここには子どもと成人合わせ約28000人のアーミッシュが暮らし、教区数は現時点で165を数える。

類似した慣習を持つ教区同士で指導者が協力関係にある場合、そのまとまりを<所属教派>という。教区や居住区のような地理的なまとまりはないが、所属教派共通の生活規則と教会のしきたりを持つ。所属教派のメンバー同士は仲間を作り、しばしば通婚もするし、牧師が相手の教会で説教することも認められている。北米アーミッシュには、それぞれに独自の慣習を持つ24以上の所属教派がある。これらの下位集団をまとめる中心組織や全国的な教団組織は存在しない。所属教派に加わる教区はほとんどの点で類似した慣習に従っているが、生活に関わる最終権限は個々の教区にある。

北米アーミッシュは、米国27州とカナダのオンタリオ州にある375の居住区に分かれて住んでいる。これらの居住区すべて合わせておよそ1600の教区がある。アーミッシュの人口のほぼ3分の2がオハイオ、ペンシルヴェニア、インディアナの3州に集中している。

高等教育、自動車の所有、インターネットの利用を拒否するこのような伝統集団は、衰退の一途をたどっていると思われがちである。しかし、驚いたことに、アーミッシュの人口はほぼ20年ごとに倍増しているのである。成人と子ども合わせ現在、その数は20万人近い。この成長を支えているのは大家族主義と高い定着率である。1家族の子どもは平均約7人だが、10人以上という家族も珍しくない。一般に若者の約90パーセント以上は教会に加わる。アーミッシュは他宗派からの転向者は求めないが、彼らの規則を守ることを条件に部外者が参入することは認めている。

聖書の教えは、「規律」を意味するドイツ語であるオードヌンク (Ordnung) を通じて日常生活に適用されている。オードヌンクは特定の教区限定の規則集であるが、通常は文書化されず、慣習と口伝により継承されていく。オードヌンクは「現世からの離脱」という聖書の教えを服装、マス・メディアやテクノロジーの利用、娯楽などに当てはめようとするものである。教会指導者達は、たいいては教区民から新たな問題が持ち上がると、その都度規則を更新する。携帯電話・コンピュータ・装飾的な家具・派手な格好など意見が分かれる問題につい

ては教区民会議で話し合う。それぞれの教区のオードヌンクは年2回、春と秋の聖餐式の前にこの会議の場で再確認される。

自動車は遠隔地への移動を可能とし、電話やテレビやインターネット等の外部との接触を可能とするものである。これらのものの利用は、世俗をあえて避け、農村共同体生活をしている彼らの共同体の生活秩序を危うくするため、その利用を禁止しているのである。

アーミッシュの集団はどこも男女に決まった服装をさせている。既婚男性は顎ひげを伸ばすが口ひげははやさず、アーミッシュ特有の帽子とベストを着用する。女性はボンネットを被り、服装は通常しばしば個人の好みを表現するものだが、アーミッシュにとっては、服装は集団的秩序への服従を表すとともに、集団のアイデンティティを公に示すシンボルである。オールド・オーダー・アーミッシュは、自動車の所有、公共の電線から電気を引くこと、テレビやパソコンの所有、高校や大学への通学、軍隊への入隊、離婚をオードヌンクで禁じている。教区民は洗礼を受けるに際して、今後は教会の規律を守り、誓いを破れば破門もあり得ることをしっかり理解した上でオードヌンクに従うことを誓約するのである。（『アーミッシュの赦し』、228-294頁、『聖なる共同体の人々』、32-33頁参照。）

アーミッシュのほとんどは農民であるが、農民組合といった団体結社への加入、非アーミッシュ経営の生命保険、火災保険の契約を結ぶことも許されない。これに代わるものとして、死亡、事故、病気といった予期しない出来事が生じた場合には、教区の執事の采配のもとに、当該家族の農作業などの一切について共同体の責任において援助を怠らない。まさにスタートせんとしている若き農民に、農場購入資金を無利子または低利子で貸し与え、農具、家畜、種子などを送ってその門出を祝う。彼らにとり、若き農民への惜しみない援助は最大の美德に数えられており、相互に助け合うことはなすべき当然の義務とされている。ほとんど全ての共同体において、火災その他による建物被害に備えて一種の集団保障制度を展開している。これは「アーミッシュ扶助計画」と呼ばれている。アーミッシュは、生命保険や火災保険になぜ入らないのだろうか。それは、もしこれに入ると、彼ら同士の美德である自立的な相互扶助の実践が困難に遭遇することになるからなのである。

アーミッシュの農業生産物は、その食の安全性とおいしさから北米でブランドとなっている。彼らは、このブランド化によって、経済的に成功しているのである。

フィラデルフィアのランカスター地方のアーミッシュは、フィラデルフィアの市内のスーパー・マーケットで、彼らの農業生産物の店舗を出している。このスーパー・マーケットでは、午後3時頃には、彼らの商品は売り切れてしまうのである。彼らは、この小市場で、農業生産と商業を両立させることによって、現代の市場経済に適応しているのである。

アーミッシュにおいて、最も重要視される教育の意義はその宗教文化の伝達にほかならない。それは両親も幼き日に伝達されたアーミッシュ固有の生活法を次世代に伝達するということである。あらゆる機会を通じて、両親は自らを範として聖書、祈祷あるいは教会規律を子どもに教え、日曜日の説教礼拝には家族全員で出席する。このように、彼らは子どもが一人の農民、主婦として教会と共同体からの期待に沿うことができる責任と義務を遂行できる人物に養育するのである。この家族の教育の足らざる所を補うのが学校という公的な場にほかならない。社会生活にとって必要最小限の学校教育、とりわけ読み、書き、算数の能力を身につけさせる目的で、18世紀中葉に早くもアメリカ・アーミッシュの牧師ヤコブ・ヘルツラーが、今日のアーミッシュ小学校の原型ともいえる単級小学校設立のために努力を重ねたことが伝えられている。アーミッシュは、今日、かつてヘルツラーが設立したアーミッシュ小学校を範とする単級小学校を、自らの財政的負担において設立、運営しているのである。（『聖なる共同体の人々』、42-43頁、58-60頁参照。）

アーミッシュの小学校の教科書には、無抵抗の愛や赦しの実践を促す話が集められている。このうちの一つ、「ピーター・ミラーの復讐」は、米国の独立戦争の時代に生きたピーター・ミラーという無抵抗主義のクリスチャンが主人公だ。

「ミラーと彼の友人達は良心に背いて戦いに加わったり、いずれか一方に加担したりできなかった。彼らは、戦争は過ちであると固く信じていた。それでも、英国人であろうと米国人であろうと、困っている人を助けることは決して拒まなかった。」

物語はそれから、無抵抗主義のミラーを「大馬鹿者」と考え、嫌がらせを続けてきたマイケル・ホイットマンという男の話になる。

ある日、ジョージ・ワシントンの群から逃亡した「餓死寸前の」男の世話をしていたミラーは、その兵士から、裏切り者のホイットマンがつるし首になると聞く。ミラーは、さんざん嫌がらせされた男の命乞いのため、

ただちに家を後にし、深い雪のなかを三日間ぶっ通して歩き続けた末に、ワシントン将軍に直訴する。将軍は、ミラーの話に耳を傾けてくれたが、ホイットマンは公正な裁判を受けたのだと言う。そうでなければ「あなたの友人を喜んで赦免するのだが」と静かに語る将軍に、「友人ですって?」とミラーは声を上げた。「彼は私の仇敵です」

ワシントンは驚き、なぜわざわざ敵の赦免を願い出するのか、いぶかしがる。しかし、結局、彼は恩赦を下すことになり、ミラーは間一髪のところでは処刑場にそれを伝えることができた。そして、話の結末は、行動は言葉に勝るといって、アーミッシュの大事な教訓を伝えるものになっている。

『ああ、ピーター』、ホイットマンは泣きながら言った。『あんなに酷いことをした俺を、なぜ赦してくれるのだ?』ピーターは黙って首を振るばかりであった。何も言えなかった。しかし、あえて何か言う必要もなかったのである。

秋の聖餐節に読まれる聖句集には、人を許さなければ自分も危うくなることを教える話がある。銃乱射事件で重傷を負った10歳の少女は、両親からこの話の意味を聞かれ、「人を赦さなければなりません」と答えたという。

乱射事件の時、13歳のマリアンが犯人のチャールズ・ロバーツに、自分を最初に撃つてと言った。予期せぬ危機に直面し、彼女が真っ先に取った行動は、我が身を投げ出し他の生徒を救う行動だった。8年生のマリアンには、イエスが身をもって示した十字架の精神、他者のために自己を犠牲にする精神がすでに身についていたのである。アーミッシュの小学校では、再洗礼派の父祖達が、迫害によって、殉教する英雄的な殉教物語も、また、教科書として採用されていることも、マリアンの後輩をかばう態度に影響を与えていると考えることができる。アーミッシュの意識の底に埋め込まれた価値観が、ロバーツの凶行に遭うや発動したのである。そして、その後さらに、赦しという形を取って現れたのである。(『アーミッシュの赦し』、176-178頁参照)

(2) フッターライト

フッターライトは、16世紀の宗教改革期に南ドイツ、チロル、オーストリア地方の再洗礼派の人々によって創設されている。フッターライトという名称は、初期のこの集団の最も有力な指導者であり、又、この集団の組織者ともいえるチロル出身のヤコブ・フッターに由来し

ている。彼らの保護者となったのは、モラヴィアのリヒテンシュタイン公であった。保護者のリヒテンシュタイン公に対して、ウィーン政府の圧力があることを知った彼らは、モラヴィアのニコルスブルクから立ち去り、彼らの保護を約束したアウスターリッツのカウニッツ公の領内に定住することになるのである。アウスターリッツへの途上、略奪などにより、困窮に直面した彼らは、各自の所有物を出し合って集団全体の存続をはかった。この出来事が彼らが財産共有共同体を实践する契機となったのである。今日、この出来事が実践された年である1528年をフッターライトの創立年としている。彼らの財産共有制の聖書の根拠は、使徒行伝第2章第42-47節の「全ての神の賜物は、霊的なもののみでなく現世のものも、一人の人が所有するためにあるのではなく、すべての兄弟姉妹と共に所有すべきである」にある。この財産共有制に立脚している点が、個人の財産に立脚しているアーミッシュとの違いである。

各共同体の宗教指導者は、説教・洗礼・聖餐等を行い、宗教的分野における儀礼の執行や指導を行う。その他に、教会のこの世的物質的なものの分配と管理を行う役割がある。今日のフッターライトでは、前者を牧師、後者を執事と呼んでいる。迫害を逃れ、彼らは、ウクライナに移住した。ここでもロシア政府のシベリア入植を強制されたので、彼らは、新天地を求め、北米のサウス・ダコタ州に移住して今日に至っているのである。北米移住当時の1874年には、3箇所の入植地に443名を数えたにすぎなかったのに対し、120年あまり後の1996年には、430の入植地と37297名の人口を擁するまでに成長している。

彼らの家族は厳格な一夫一婦制を取っている。配偶者選択は、同一の共同体か類似の同じ宗派の共同体間で行われている。彼らは父型居住婚の形態を取っている。新婚夫婦のために、牧師あるいは執事の妻が彼らの新居を指定し、家具その他一切の生活必需品をアレンジする。彼ら自身でこれらの品々を準備する必要は全くないのである。フッターライトは男性中心の社会である。共同体の役職である牧師・執事・部局責任者・学校教師など、公的意思決定はすべて男性の既婚メンバーに限定されているからである。女性の地位がこのようなフォーマルな形では限定されているが、インフォーマルな面では女性の影響力は大きいと言える。例えば、女性の職場である調理上の設備改善のような共同体レベルの問題では、夫を説得して間接的な影響力を行使しているのである。より適切に表現するならば、「女性により助けられ支えら

れている男性社会」なのである。

共同体における性別役割分業は明白である。男性は農場で高性能の大型農業機械を駆使して農耕にはげみ、同じく高度に自動化された畜舎で乳牛、豚を飼育し、また鶏舎や七面鳥舎で数万を数える家禽類を飼育している。他方、女性は唯一の女性執事の指揮のもとに、調理場で共同体全員の食事の準備をし、パンを焼き、保存食料を作り、洗濯場で働き、そして核家族の家事の責任を担うのである。

フッターライトでは、自己発達ではなく、「自己放棄」が目標である。個人の意志ではなく、共同体の意志が重要となる。自己放棄は、個人が自己のあらゆる欲求、関心、利己心を捨て去り、全身全霊、全人格をあげて神の意志に服従し、神の摂理に身を委ねることである。同時に、自己放棄は唯個人レベルにとどまることなく、それは財産共有共同体という集団レベルにおいてはじめて達成されるということでもある。フッターライトにおいては、財産共同体の一員となるべく、幼少時より入念な社会化教育が行われるのである。彼らは教育を自己改善の手段ではなく、「神についての知識と神を畏れること」を子どもに移植する手段と位置づけている。彼らの目指すところは、次世代をして優れたフッターライト成員に養育することなのである。

宗教的訓練は乳児が若干の固形物を摂取できるようになった頃から始められる。幼児が3歳になると保育所に入る。保育所は共同棟の調理場近くに設けられている。保育は、「教会によって任命された姉妹」が交代で保母役を担当している。保育所では、幼児達は、初歩的な宗教教育と共に、日中の大部分の時間を家族と離れて過ごし、共同体の一員であることも学ぶのである。そこでは可能な限り自己主張は抑制され、その年齢集団の仲間と協調しながら自らが如何に行為すべきかを学習するのである。保育所の年齢は、3歳から5歳までである。6歳から14歳までの児童期は、小学校で学ぶ。現在のフッターライトでは、小学校と英語学校が設置されている。彼らの教育を全面的に担当し、その全責任を委ねられているのは、共同体によって選出された学校教師及びその妻である。教師は児童の信仰に関してのみでなく、あらゆる生活行為に全責任を負っている。6歳児には、初歩的なドイツ語読本が、上級生になればルター訳聖書、聖書物語、そしてフッターライト史などが与えられている。児童はこの小学校でドイツ語をほとんど暗記法といって良いような方法で学び、聖書の言葉やフッターライト讃美歌を誦んじなければならない。食事の時には、教師の

妻が食堂のテーブルに食物と飲み物をととのえ、子ども達の食事の世話をし、食事のマナーを教えるのである。英語小学校には6歳から14歳までの児童が通学し、州政府が定めたカリキュラムに従った教育が行われている。この英語小学校のスケジュールのゆえに、伝統的な小学校はその始業前、放課後あるいは休暇中の午前中に開かれている。

15歳以降の青年期には、成人労働者として日常的な共同体の仕事が割り当てられる。朝食後にその日の作業が指示され、日中その作業に従事しなければならない。洗礼のための特別教育が入念に施されるのもこの時期であり、洗礼式に先立つ6週ないし8週の期間行われる。洗礼式は一般にイースター前の「枝の主日」に行われる。志願者は牧師による最後の特別教育を受ける。洗礼を受けた後は、男性は正規のメンバーとして共同体の意思決定に参加し、役職者選出のために投票する特権が与えられる。

今日、北米の彼らの共同体では、高度に多角化した農業を常に実践している。万一、一つの農作物が価格の暴落や天候不順のゆえに失敗したとしても、他の部分でその欠陥を補うことが可能となるからである。大型の近代的農業機械を駆使し、またこの高度に多角化した農業経営により、今日の北米の市場経済的農業市場に適応し、彼らの生活の安定をはかっているのである。

彼らは、幼少時からの宗教教育により、自己放棄の内面化が進められ、完全な自己放棄が共同体によって確認されてはじめて、共同体の一員としての加入が洗礼という形で実現される。ここにいたって、彼らは、財産共同体の正規の成員として、私的活動ではなく、共同体の仕事に専念することになる。彼らは、彼らの職業労働である農業労働に勤しむのである。フッターライトは、その予算支出の大半を農業生産に使い、日常生活に直接関係する支出は最小限に抑制されている。禁酒、禁煙が課せられており、娯楽費の如き支出は全くない。このように、フッターライトでは、世俗的禁欲生活が厳しく実践されているのである。この点にも、「自己放棄」の精神が貫かれているのが分かる。「自己放棄」と「財産共有制」というフッターライト特有の教えは、彼らの禁欲生活と仕事への勤勉を生み出す心理的起動力となっているのである。フッターライト共同体において獲得された富、財貨を管理するのは個々の成員ではなく、牧師を長とする委員会、より具体的には執事に委ねられている。彼らこそ、神によって与えられた財産を預かっている「神の管財者」なのである。彼らは何よりも優先して農

業生産に必要とされる費目の支出をし、節制に努めて生計費を可能な限り切り詰め、可能な限り多額の剰余金を生むべく最善の配慮を怠らないのである。このようにして生み出された剰余金が入植地設立時の債務返還に充当されると共に、新設に際しての重要な投下資本となるのである。フッターライトが今日、次々と入植地を新設して繁栄しているのは、彼ら特有の「自己放棄」と「財産共有制」の教えが経済面で実践されていることと深く関係しているのである。(『聖なる共同体の人々』、89-95頁、101-135頁参照。)

3. ガンジーの非暴力国家思想論と柳田国男の協同組合思想論

本章では、マハトマ・ガンジーの農村連合政府構想による非暴力国家思想と柳田国男の貧農救済策としての協同組合思想について論じてみよう。

先ず最初に、ガンジーの非暴力国家思想について見てみよう。

(1) ガンジーの非暴力国家思想

ガンジーは、各インドのそれぞれの村がすべての権限を握っている共和国、つまり、パンチャーヤットになることを提唱した。ガンジー当時インドでは70万の村があった。彼は、この70万のパンチャーヤットは連合制度に集められるという計画案を立案している。村のパンチャーヤットの代表は、タルカ・パンチャーヤット(大体20の村)を組織し、その代表がまた地域パンチャーヤットを組織し、その上にまた州レベルのパンチャーヤットがあり、そして最後に全インドのパンチャーヤットが組織されるという構想になっている。だからといって、全インドのパンチャーヤットである中央政府に主権があるわけではない。村のパンチャーヤットの上の組織は国連のような組織である。つまり、かなりの権威はあるが、加盟国の主権に干渉する権利のない国際機関のような組織なのである。この上級の組織の機能は強制的ではなく、助言的である。下のパンチャーヤットをガイドし、相談に乗り、監視をするが、命令はしないのである。

自由インドの行政の基本的な単位となるのは、自給自足かつ自治の村である。その方式は、インドの昔からの伝統に合うとガンジーは考えたのである。

各村は、成人全員の選挙で、パンチャーヤット(普通は5人)を選ぶ。村が大きい場合、5人から11人を選ぶこともある。パンチャーヤットは全員一致でサルパンチ

(議長)を選ぶ。全員一致ができない場合、村民の成人全員が、パンチャーヤット員から議長を選挙で選ぶ。パンチャーヤットの任期は通常3年とする。パンチャーヤット員は3回まで選ばれる。しかし、パンチャーヤット員の一人は、任期中に村の信用を失った場合、村民の75パーセントの投票でリコールできる。村のパンチャーヤットだけが、収税会計記録官、夜警、警官などの役員を任命できる。特に少数派の権利に関係のある場合、パンチャーヤットの決定はなるべく全員一致とする。

村は最大の自治権を行使するので、パンチャーヤットの機能は、村の社会的経済的政治的生活のほとんどすべてを含む、広くて総合的なものである。それは、次のようになっている。

①教育

- a 生産技術を学ぶ小学校または基礎学校を運営する。そうすると、文化的教育と技術的教育は合同となる。
- b 図書館と読書室を運営する。図書館の本は教育的で、村の社会的、経済的、政治的活動と直接関係を持たなければならない。
- c 大人のための夜間学校を運営する。

②レクリエーション

- a アクハーダ(体育館)、遊び場などを設ける。インドのゲームやスポーツを勧める。
- b 定期的に美術工芸の展覧会を開く。
- c それぞれの共同体の重要な祭日を皆で祭る。
- d 年中行事を組織する。
- e 賛歌を歌う会を組織する。
- f 民謡、民舞、民劇を奨励する。

③治安

- a 村を、泥棒、強盗、野生動物から守るため、保護者を置く。
- b すべての市民に、サティアグラハ(非暴力運動)や非暴力抵抗と防衛の定期的訓練をさせる。

④農産業

- a それぞれの村の農業小地所の使用料を算定する。
- b 借地人から使用料を集める。
- c 借地の統合や共同農業を進め、組織化する。
- d 灌漑のための適切な配置をする。
- e 共同の店を通して、質のいい種と能率のいい道具を提供する。

- f 必要な食用穀類がなるべく村の中で生産されるよう
に進める。現在の換金作物制度を思いとどまらせ
る。
- g 借金を概観し検察して、必要ならそれを抑えて、そ
してその利息率を管理する。
- h 土地浸食を止め、共同労働で空き地を開墾する。

⑤産業

- a 村で消費するカーディー（インドの手織り布）の生
産を組織する。
- b それ以外の村産業を、共同産業方式で組織する。
- c 牛乳・乳製品製造場を運営する。水牛より牛を勧め
る。
- d 死んだ動物の皮を使用する皮なめし工場を運営す
る。

⑥貿易と商業

- a 農工産物の共同販売を組織する。
- b 消費生活協同組合を組織する。
- c 生産物の余剰だけを輸出し、村で生産できない必要
品だけを輸入する。
- d 共同蔵を運営する。
- e 村の職人の必要に応じて、低価格の信用機関を設け
る。

⑦衛生と医療制度

- a 適切な下水施設を運営することによって、村の衛生
を守る。
- b 公害を阻止し、伝染病の広がりを食い止める。
- c 健康な飲み水のための施設を運営する。
- d 村野病院及び産婦人科センターを運営する。医療は
無料にする。伝統的療法、自然療法などを薦める。

⑧司法

- a 安くて速やかな司法制度を提供する。パンチャー
ヤットは民法に関しても刑法に関しても幅の広い権
限を有する。
- b 無料の法律扶助を提供する。

⑨財務および課税

- a 特別な目的があった場合、税金を取り立て、徴収す
る。現物給付や村の企画のための共同肉体労働を進
める。
- b 社会的または文化的行事のための個人からの寄付を

受け付けする。

- c 出入金の会計を観察する。会計書類は公的監視や監
査に開かれている。

村の社会的、経済的、政治的活動を調整するため、タルカ（村の複合）及び地域パンチャーヤットを組織する。この上級の組織の機能は強制的ではなく、助言的である。下のパンチャーヤットをガイドし、相談に乗り、監視をするが、命令はしない。

ガンジーの目指す理想郷は、ロシアの無政府主義者のピョートル・クロポトキンの『相互扶助論』に描かれている社会に似ている。村の組織は人間にとって最も自然な組織なのである。村民は最も自然な相互関係を持って、自分にとって最も自然な性格を形成し、村も最も自然な働き方をし、そして平和と秩序を守るためにその村を外から支配・統治する必要はないのである。これは具体的な歴史的証拠に基づいた共和国案なのである。インドの伝統的な村は、村人の「相互扶助」に基づき運営される自立（スワラージ）した自治組織だったからである。この自治組織は外部の組織に依存せず村内で運営されるので、外部の組織と争いが起こる可能性が少ないのである。村を中心としたこの国家案は、彼の非暴力と平和を貫くのに適合した案なのである。その意味で、この政府案は、ガンジーの平和憲法案なのである。（『ガンジーの危険な平和憲法案』、61-64頁、73-81頁、87-103頁参照。）

前章で論じた世俗逃避的キリスト教平和主義のアーミッシュやフッターライトも農村共同体である。自立した農村社会のほうが非暴力主義と平和主義と相互扶助を貫くのに適しているからなのである。ガンジーの非暴力国家論も、農村に基礎を置いた構想なのである。

ただ、彼のこの国家構想は、アーミッシュやフッターライトのように、村の中に孤立して閉じこもるのではなくて、村の主権を重視しながらも、より開かれた村共同体連合の政府を目指す構想だったのである。

次に、柳田国男の協同組合思想について見てみよう。

（2）柳田国男の協同組合思想

柳田国男は、1900年に成立した産業組合法に立脚して、農民同士の相互扶助の精神に立脚し、協同組合事業を通じて、農村の貧困問題を解決しようとしていた。彼は、協同組合事業を通じて、農村の構造改革事業を成し遂げようとしていた。それは、農業生産力中心の上位下達による協同組合押しつけの国家政策とは異なり、農民

の自助と協同による相互扶助の精神に立脚した下からの協同組合であった。西洋、特にイギリスでは、労働者自らが、自助と協同の相互扶助精神に立脚して、協同組合を結成したのである。イギリスでは、解雇されたロッチデールの職工達が、自分たちの生活を守るため、自らロッチデールの職工協同組合を設立したのである。西洋では、このように、下から自発的に協同組合が成立したので、協同組合の基礎精神である自助と協同の相互扶助精神が組合員相互に浸透し、組合員達の間にも自ずと身についてきているが、日本では、国家政策として、上から協同組合事業を推進しようとしてきたため、協同組合を支える相互扶助の精神が未発達であるのが問題であった。資本主義の市場経済競争と明治政府の鉄道等のインフラ整備事業により、日本の農業は、地方の小市場が大都市の中央市場に直接支配される「中央一極集中型」の農業構造となり、小市場が衰微してしまったのである。これに対し、西洋農業では、先ず、地方の小地域の小市場があり、それらの小市場が連鎖して形成された地方の地域連合の中市場があり、それに加えて、大都市の大市場が形成されているという構造になっている。そのため、小市場・中市場・大市場が併存する「地域分散型」の農業構造になっているのである。この「地域分散型」の農業構造が維持されているので、西洋では、この基礎の上に、農業の小市場経済取引を行い、農民達は自助と協同の相互扶助の精神に基づく協同組合を発達させてきているのである。日本でも、中央志向中心のインフラ整備事業ではなく、地方中心のインフラ整備事業である県道や地方鉄道の整備事業により、農業の小市場経済取引を再生させ、その連鎖蓄積により、地域連合による中市場を発達させていくことが、農民の幸福、ひいては日本国民の幸福に繋がると柳田は考えたのである。この小市場・中市場・大市場併存政策を採用し、日本の協同組合事業を発展させていくことが、今後の日本の取るべき道であると、彼は考えていたのである。

協同組合事業の基礎精神である自助と協同の相互扶助精神は、年貢支払いのため、農村が一致団結した江戸時代の農村の相互扶助の郷党の結合精神に見られると考え、その郷党精神を農民達に自覚させることが協同組合を推進するために何より大切であると考えたのである。そのためには、農村に根付いている民俗精神を掘り起こす作業が必要であると考え、民俗学を志向することになったのである。彼の著作である『遠野物語』や『後狩詞記』は、自助と協同の相互扶助精神を農民に自覚させることを意図して作られた民俗学的著作なのである。

(藤井隆至、『柳田国男』、82-98頁、114-126頁、134-166頁、194-200頁参照。)

ところで、農民には、農地面積の大小により、小農・中農・大農に分けられるが、資本主義的市場経済の自由競争という過酷な環境の中で農業を営んでいくためには、小農のままでは無理で、小農を中農に引き上げ、小農から中農へと、農地面積の拡大を図る中農養成政策を行うことが必要であった。

中農養成政策として、柳田は、生産の3要素である土地・労働・資本の再分配政策を提示している。「土地の再分配策」としては、個々の農家に当時の2倍以上に当たる2町歩以上の農地面積を持たせるという提案を行っている。一戸あたりの農地面積を2倍以上に拡大するためには、日本全国の農地面積に変化がないとすれば、農家戸数を半分以下に減らさなければならない。

そこで、「労働の再分配策」では、農業からの転業、つまり離農が積極的に奨励されている。それは、離農する農民にとっても、収入を増やすうえで必要なことであった。離農するにあたっては、村から離れて外に出るのも構わないが、柳田は、村内で農業以外の産業、具体的には工業に従事することを視野に入れている。村内で農村工業を活発にすれば、そこに人口を吸収することができる。農村人口を減少させることなく、「中農」を創出し、かつ工業を育成できるという一石二鳥の案である。「中農」が市場経済に即した経営を行うためには、農業改良事業、すなわち、農業者の能力向上を行う事業が必要であった。その事業には、技術面の能力の向上ばかりでなく、「農業教育」も含まれていた。「農業教育」では、生産技術に関する教育ばかりでなく、経済の教育も重要視されている。それは市場経済に関する教育である。農業者は、市場に向けて生産し販売する。また市場を通して肥料や農機具、生活用品等を購入する。市場経済や地域経済に関する十分な経済知識が必要となるのである。農業教育の場として彼が期待したのが産業組合である。産業組合の組合員は農業者と工業者である。産業組合は商業活動・金融活動を行うので、農民にとっては、産業組合での活動が同時に商業教育・金融教育の場となるのである。

市場経済下の農業経営にとって、資本は不可欠である。資本の不足が市場での敗退に結びつくとは彼は考えていた。このためには、一つには政府が補助金を農家に出すという方法がある。柳田はこの方法に批判的であった。彼は、補助金政策のもとでの農民は、補助金に依存し、農民自身の経済合理性や自助の精神を損なってしま

うと考えていたからである。「資本の分配策」で、彼が提示している方法は、農民自身が資本を自ら調達するという自主金融の方法である。その手段は信用組合の活用である。販売組合で売り上げを増やし、購買組合と生産組合でコストを節減し、この3組合によって得られた利益を信用組合に貯蓄して組合員相互で融資しあうという方法である。柳田は協同組合による資本供給策を積極的に奨励していたのである。（藤井隆至、『柳田国男』、98-107頁参照。）

柳田は、当時の上から下への農業政策から、下から上への農業政策へ政策を転換することにより、日本の農地改革を断行し、日本の貧農問題を解決しようとしたのである。この農業政策の手段となる方法は、「自助と協同」や「協同相助」という相互扶助精神に立脚した「協同組合」だったのである。

村社会の「協同相助」の相互扶助精神を掘り起こし、それを基礎にした農業生産組合・購買組合・販売組合・信用組合を結合した協同組合連合を村社会に広め、その農業生産物を小市場に出荷する方式を全国的に拡大すれば、彼の下から上への農業構造の変革は可能となるのである。これにより、従来の中央市場一極支配型の農業構造から、村の小市場・小市場の連鎖である地域の中市場・中央の大市場が併存する地域分散型の農業構造へと、日本の農業構造の変革が行われるのである。それは、村民の自助と自治に基づく下からの民主主義の実践でもある。明治の急速な工業化は、農業を周辺に押しやり、地方の農民と大都市の非農業民との格差を増大させてしまった。柳田の協同組合的社会的政策は、この格差を是正し、平民の大多数が幸福になる国民幸福社会の実現を目指す試みであった。

農村の自助と協同の相互扶助精神を基礎とし、農村を単位として、その農村の連合体である地域、その上位にある中央政府へと積み上げていく下から上への民主主義的政府構想という点で、ガンジーの非暴力国家思想論と柳田国男の協同組合思想論は共振関係にあるのである。両者の実践思想は、自国の伝統を基礎にそれを生かそうとする構想であり、単なる絵空事ではなく、政策によって十分実現可能な試みだったのである。

ともあれ、彼の社会的政策は、「日本国内」に集中した社会的政策であり、グローバルな「対外的視点」を持っていないのが欠点であると言えよう。このグローバルな対外的視点については、賀川豊彦の平和思想やマックス・ヴェーバーの「移民問題」も視野に入れた農業政策や国際的政治社会学を論ずるときに、詳しく論じることにし

よう。

4. 世俗内的キリスト教平和主義論

本章では、最初に、キリスト教平和主義の宗派の中で、世俗内的キリスト教平和主義の傾向を示すクエーカー派の思想とその実践活動について述べ、続いて、ピューリタン派の思想家である賀川豊彦の協同組合的平和主義思想について論じ、最後に、同じく、ピューリタン派の思想家であるマックス・ヴェーバーの農業政策論と国際政治社会学の平和思想について考究して、まとめとすることにする。

まず最初に、クエーカーの思想とその実践活動について見てみよう。

（1）クエーカーの共同体思想とその実践活動

1638年に、スウェーデン人とフィンランド人が先住民のインディアンと毛皮とたばこの交易をするために、現在のフィラデルフィア南部・ウィルミントン・チェスター近辺と南西ニューキャッスル近辺に居住することになったのが、この地域におけるヨーロッパ人による植民の始まりである。この地域は、ニュースウェーデンと命名され、1643年に、スウェーデン人のヨハン・プリンツ総督は、現在のティニカム島をニュースウェーデンの首都に定めた。この当時、イロコイ族との交易により、利益をあげていたニューアムステルダム（現在のニューヨーク）のオランダ人は、この交易により、その源から彼らの利益を吸い上げられてしまうことを恐れていたため、この交易を快く思わなかった。彼らは、この植民地に兵士を送って、わずかな抵抗ののち、この植民地での支配権を確立した。彼らは、この地域のニューキャッスル近辺にあるスカンジナビア砦をニューアムステルダムという名前に変えた後、他の地域に再植民を行い、この地域を植民地化するための努力をあまりしなかった。

1654年に、英国は、オランダからニュースウェーデン地域を奪い取り、その結果、この地域は、オランダ領から英国領に変わった。1680年に、この地にやってきた大部分の英国人の新来者達は、デラウエア川下流の地域とその近辺が気に入ったが、そこでの植民のための何の計画も持っていなかった。

フィラデルフィアの生みの親であるウィリアム・ペンは、こうした状況の中で、颯爽と歴史の舞台に登場してくることになるのである。様々の英国政府の地位を歴任し裕福な地主であった彼の父ウィリアム・ペン海軍総督は、友人である英国王チャールズ2世に多大な財産を貸

していた債権者でもあった。この息子のウィリアム・ペンは、当時の英国国教会を批判したため迫害を受けていたクエーカー教の信徒であった。彼は、信仰の自由を公然と掲げ、英国国教会の支配に反対し、反王政の立場を取っていた。このため、チャールズ2世にとっては、彼は英国王政を破壊する目の上のたんこぶでやっかいな存在であったが、彼の父が政府の要職にあるため、乱暴な取り扱いはできないでいた。ペンの信仰していたクエーカー教の創立者ジョージ・フォックスは、人間はだれでも、心の中にキリストの「内なる光」を有していると考え、そのため、神と人間とを媒介すると考えられてきた宗教的祭司や宗教制度に基づく聖職者は一切必要なく、個人が神と直接的な関係を持つべきであると主張していた。神の下に人間は平等なので、市民的な階層性も必要ないと、フォックスは主張していた。この教えを信奉するペンは、チャールズ2世にとって、英国王政を否定する危険な存在であったのである。彼の父、ペン総督の死後、息子のペンが、この国王に借金の返還を要求してきたとき、この国王の心の中に、自分自身の借金を棒引きにし、しかもこの厄介者を追放するための一挙両得の考えが閃いたのである。それは、英国の領土であった現在のペンシルヴェニア地域を彼に割譲する案だったのである。国王には、この地域は、海岸のない内陸にあるため、望ましくない地域と考えられていたこともその理由の一つであった。この案は、信仰の自由とその理想の実現を求めていたペンにとっても渡りに船の案であった。彼は、この国王の提案に賛成し、1681年に、国王よりこの地を与えられることになった。この地は、ペンの父に敬意を表して、ペンシルヴェニアと名付けられた。その翌年の1682年に、彼は、アメリカのこの地にやってくるようになった。内陸にあるこの地域は、彼によって、豊かで戦略上重要な位置付けを持つ植民地に変えられることになったのである。彼は、クエーカー教の教えに基づき、人権が尊重され、個人の自由が認められ、思想的寛容と平和主義が貫かれる社会作りを提唱し、市民が自分たちで法を形成し、それに基づいて市民が統治する民主主義社会をこの地で行うことを宣言した。これが、彼の権利の章典である。貴族である彼が、彼の理想に基づき、貴族制度を否定し、自由で民主主義的な社会を作ることを誓約したのである。この地に既に住んでいたヨーロッパ人達は、このペンの革命的な理念を喜び歓迎したのである。この理念は、この地の先住民であるインディアン達にも適用されたのである。

1683年に、ウィリアム・ペンが彼の理想郷の試みの場

として、フィラデルフィア市を築いたのである。フィラデルフィアとは、ギリシャ語で「友愛」を意味する言葉であり、彼は、自分の理想を表現するために、その町の名前をフィラデルフィアと名付けたのである。クエーカー教徒として、ペンは、自分の作ったこの共同体を、あらゆる宗教が互いに平和で公平に取り扱われる市民社会として構想していた。

彼は、フィラデルフィアの町をこの地域の首都と定め、その町を、まっすぐな通りと果樹園や庭を持つ緑豊かな町にするという田園都市計画を立案した。この都市計画案は、部分的にしか実現しなかったが、アメリカの他の町が都市計画を立てる際に、それを鼓吹する役割を果たしたのである。また、この地域の商業や農業振興のための土台形成作業も行ったのである。彼のこの地域での滞在日数は、わずか2年にすぎなかったが、その間に、この地域の政治的並びに経済的基礎を築くと共に、都市計画案も提示したのである。

1677年に、ペンは、同じ信仰を持つクエーカー教徒達がニュージャージーの西部に居住するのを援助したことがあった。その経験により、彼は、植民者が利益の上がる事業であることを確信していた。

1681年に、国王チャールズ2世から、45000スクエアのペンシルヴェニアの土地を割譲されたペンは、上記の経験からこの土地で植民事業を行うことが良いと考え、この事業を成功させるために、植民者がニュージャージーよりもペンシルヴェニアに植民する気になる動機付けを与えねばならなかった。宗教的自由を与えることは、その動機付けの一つであったが、それに加うるに、植民者に魅力的な土地を与えることも動機付けとして大切であった。彼は、植民者が農業に従事できるために、地味豊かな土地を植民者のために提供したのである。それは、そのおのおのが5000エーカーからなる土地を、共有地として100提供したのである。彼が、この地において提供した土地は、全体で、500000エーカー以上であった。

ペンは、その地の鑑定及び測量を行うため、そうした仕事の経験のあるアイルランド人のクエーカー教徒で、ビジネスマンでもあったトーマス・ホルムをその職に任命し、その地の開拓計画を行わせた。ペンより先に、ペンシルヴェニアに行ったホルムは、先住者のあまり住んでいないスキルキル川とデラウエア川の間の狭い土地を、政務を行う政府を置く場所として選択した。彼が、スウェーデン人から購入してきた土地は、わずか200エーカーだった。後からきたペンは、これでは将来における

発展性が約束されないと考え、その地をさらに拡大し、1200エーカーからなる土地を購入した。この土地が基盤となって、現在のフィラデルフィア市が形成されることになった。

現在のフィラデルフィア市は、直線道路が縦横に交差し、小区画の長方形の土地が多数集まって大区画の長方形の土地を形作っているが、このプランは、ペンとホルムの両者によって創出された案なのである。中央にメインの四角い広場を置き、その四方に4つの四角い広場を持つセンターシティ案は、ホルムが知っていたロンドンデリーの都市計画案やペンが知っていたロンドン大火後の再建築のためのリチャード・ニューコート都市計画案によく似ているからである。このことは、1687年のホルムの地図に示されている。それによれば、この地域は、メインの四角の広場とその4方に4つの四角い広場を持ち、直線道路が縦横に張り巡らされ、多数の小区画の長方形の集合体である大区画の長方形のエリアが政務や商業の地域であり、その外部は、何の区画もない緑豊かな広大な農業地域となっている。ペンとホルムは、都市計画が施されたセンターシティエリアとそうしたプランを一切考えなかった農業地域のエリアの二つのエリアからなる地域として、このフィラデルフィア地域を形成したのである。ホルムの地図には、ロンドンデリーの都市計画案とニューコートの都市計画案の両方が組み合わせられ、さらにペンの希求した緑豊かな田園がその町の外部を取り囲む構造になっているのである。従って、現在のフィラデルフィア地域の原型は、ペンとホルムの両者が話し合っただけの両者の合作として形成されたものであると考えられる。(Douglas Root, pp.15-27., John Andrew Gallery, pp.8-11.)

ところで、ピルグリムファーザーズと呼ばれる英国のピューリタン達が、信仰の自由を実現できる地を求めて、メイフラワー号に乗船し、英国のプリマス港からボストン近郊のプリマス植民村に到着したのは1620年である。このピューリタンによる植民が、アメリカ合衆国における本格的な植民の魁である。1630年、このプリマス植民村が宗教的、政治的、経済的、自衛的独立を達成してから、この地へ大量に移民が押し寄せることになった。この年、11隻の船で1000人のマサチューセッツ植民開拓団が到着後、数万人が続き、ここにニューイングランド植民地が形成されることになったのである。

とは言え、ピューリタンの植民がその信仰の純粋性を維持するため、排他的で他のプロテスタントやカトリックの入植を歓迎しなかったのに対して、ペンの自由で寛

容な思想は、他のプロテスタントやカトリックや他の宗教にも寛容であったために、ペンシルヴェニアやフィラデルフィアには、多様な宗教を持った諸民族が移住することになったのである。また、ピューリタンの開拓団は、入植のための資金を持っていなかったため、ロンドン市民投資家の会社から7年契約の融資契約を結んで入植のための資金を獲得したのに対して、ペンの入植は、ペンの父の残してくれた裕福な財産を基にして借金なしで行われたのであった。ニューイングランドのピューリタンとのもう一つの違いは、ピューリタン達が自分たちの精神的拠り所である教会の礼拝に集うために、教会から歩ける距離か馬車で行ける距離の範囲に居住しなければならなかったのに対し、ペンシルヴェニアのクエーカー達は、集会形式の礼拝であったために、教会という特別の建築物を必要とせず、個人の家で小集団が集う形式を取った点にある。(監修 James W. Baker、『メイフラワー号 プリマス開拓村』、2-5頁、John Andrew Gallery, p.11.)

1700年には、フィラデルフィアの人口は、約6000人で、ペンシルヴェニア全体では、20000人であった。新しい植民者の大部分は、英国や他のヨーロッパ諸国のビジネスマン達に、船賃や経費を借りてやってきた年季奉公者であった。ペンの家族によるペンシルヴェニアの宣伝や植民者がその家族や友人に送った手紙は、時期に適っており、ペンシルヴェニアへと新しい植民者を誘うことになった。この地は、穀物や肉や材木が豊富で、西インド諸国との活発な交易を行っていた。植民は、内陸へと拡大され、フィラデルフィアは、生産物や動物の毛皮を内陸の別の船に積み替えるための重要な地点となった。その後、まもなくして、財力と教養のある世界的大商人がフィラデルフィアに現れることになった。彼らの大部分は、クエーカー教徒であった。大英帝国が、例えば、北米でフランスとインディアンの同盟軍と戦ったフレンチインディアン戦争(1755年-1763年)のような軍事的冒険ができたのは、こうした豊かな大商人が払った税金があったからである。これらの大商人階級は、大英帝国が軍事行動を行うために彼らに課された税金に立腹し、結局、彼らは、アメリカ独立戦争の時に、アメリカ大陸の軍隊に資金を融資するために彼らの財力を使うことになったのである。こうした初期のビジネスマンの中でもっとも成功した代表的な商人として、ロバート・モリスを挙げることができる。彼が住んでいた邸宅は、初代大統領ジョージ・ワシントンが、大統領として執務していた1790年から1797年にかけて、大統領の住居として

使われたことでも有名である。モリスは、アメリカ独立戦争の時、英国と絶交したくなかったが、最後には、これを受け入れ、1781年に、ジョージ・ワシントンが彼の軍隊をヨークタウンに移動するのに必要な資金を提供してくれたのである。

ウィリアム・ペンの政府が掲げた自由と寛容の原則は、ヨーロッパでは注目されなかったが、その理念により、ペンシルヴェニアは、移民に注目され、彼らを誘う魅力的な場所となった。そのあるものは、宗教的自由を望む非国教徒であり、また、経済的な機会を欲する低所得層であった。彼らは、ペンシルヴェニアでは、選挙権を持ち選出された官吏になることさえできる十分な土地を容易に獲得できると聞いたのであった。義務的な軍事奉仕をする必要はなく、また、市民的自由は、先住民にも保証されていたのである。

1680年から1710年の間は、ペンに従った大部分の植民者は、彼と同じ信仰を持つ英国やウエールズやドイツから移住してきたクエーカー教徒であった。彼らは、その多人数と富のため、1756年までペンシルヴェニアの議会で支配的な勢力を持っていたのである。彼らは、インディアンとの戦いのため軍事力が必要となったため、開拓民の植民者が支持しなくなったとき、その支配的地位を失ったのである。(Douglas Root, pp. 19-25.)

ウィリアム・ペンの友愛と非武装平和に基づく政府構想は、超国家主義的思想に支えられていた。「平和をもたらす真の手段は正義であって戦争ではない。」と説き、個人がその国の政府の法治に服するように、政府はそれよりも高次の政府の法治に従うべきであるとして、国際連合機構のような組織を欧州に組織することを提案していたのである。ペンの平和国家構想は、国家を越えたこうした国際組織の樹立を前提にするものだったのである。1693年刊行の『欧州平和への展望』の中で述べられているペンのこのアイデアは、現在の国連を先取りした構想だったのである。フィラデルフィア市は、市営ホールを中心にして、その道路の両側に世界の国旗がはためく都市設計となっている。この都市イメージの中に、ペンの理想である世界の人々が相互に手を取りあって友人となっていく友愛と世界平和の実現の願いが込められているのである。(賀川豊彦、『世界国家』、第4巻第5号、「ウィリアム・ペン」、16頁、『世界国家』、第5巻第1号、「世界平和に向かって人々はどう努力したか(1)」、28-29頁、ヴァイニング夫人著、『民主主義の先駆者 ウィリアム・ペン』、1-3頁参照。)

日本とアメリカの間に戦争が勃発し、フランクリン・

D・ルーズベルト大統領は、1942年2月19日、大統領行政命令9066号に署名した。そして、115000人の日本人と彼らのアメリカ生まれの子供達が、家や財産をただ同然に没収され、トランク2個のみで強制移動させられ、アメリカ全土にある収容所に収容させられたのである。皮肉なことに、この移住により、西海岸地方に多く居住していた日系人達が東海岸地域に移り住むきっかけとなったのである。かつて西海岸に住んでいた日系人とその両親は、集団移動を開始したのである。

ところで、この日系人の収容所での教育や収容所からの解放には、平和主義者のクエーカー教徒の人達の尽力が大きかったのである。2008年9月に実施されたフィラデルフィア日本人キリスト教会の2人の長老の聞き取り調査の話では、心あるクエーカー教徒の人達が、日系人の住んでいた家や財産を預かってくれていたので、家や財産を失わなかった人達もいたのである。この感謝の念から、クエーカー教徒になった日系人もいたのである。ウィリアム・ペンの時代から今日に至るまで、クエーカー教徒の人達は、反戦平和を貫き、戦争等のために困窮している人のための真の友となり、その支援活動をする友愛精神の持ち主なのである。この優しさの精神と多様な価値を許容する開かれた寛容の精神の中に、平和と友愛の使徒クエーカーの霊性の真骨頂がある。

次に、フィラデルフィアのクエーカー教徒の G. A. Barnes 氏に2010年8月に行ったE・メールによる添付ファイルの質問紙調査から得られたデータと「ユートピアの挑戦」というタイトルのホームページ (<http://www.geocities.co.jp/berkeley/3860/Utopia/040.html>) に掲載されているフィラデルフィアのクエーカー教徒についてのデータに基づき、フィラデルフィアのクエーカー教徒の集会について論じてみよう。

現在、フィラデルフィアのクエーカー教徒数は、約1100名である。フィラデルフィア市内のクエーカーの公式の集会所は、8箇所ある。そこでは、公式の礼拝が、1週間に1回行われる。7箇所では、日曜日に、他の1箇所では、金曜日に公式の礼拝が行われる。

1箇所の公式グループの会員と2箇所の非公式グループの会員は、水曜日に礼拝を行う。その他に、フィラデルフィア市内には、非公式の集会所での礼拝が複数ある。公式及び非公式のこれらの礼拝で使われる言語は英語である。それ以外に、礼拝でスペイン語が使われる集会所が2箇所ある。クエーカーの組織には、議事や諸活動等の取り決めを行う礼拝会を兼ねた事務会がある。事務会は、月ごとに行われる月会・四季ごとに行われる季

会・1年に1回行われる年会がある。重要事項は、これらの事務会に諮って決定される。フィラデルフィアでは、現在、月会が年8回、季会が年4回、年会が年1回開催されている。月会、季会は、現在、日曜日に、年会は、様々な曜日に開催されている。1年に一度の年会は、かなり大規模で、約12000人の会員が一堂に会して行われている。

月会・季会・年会の運営を行うため、財務・教育・出版・国際活動・社会活動・平和活動等の委員会組織がある。委員や委員会の仕事は、集会の運営・会員の信仰や生活問題の世話・社会活動等である。それらの委員は、事務会で指名推薦され、事務会に諮って決定される。また、フィラデルフィアでは、諸委員会活動を支える組織として、環境問題等のトピック別のワーキンググループが約70ある。各種委員会活動や事務会は、週日の夕方や土曜日や日曜日の礼拝後に行われている。礼拝及び集会の運営活動費は、会員の献金とその利子によって賄われている。会員になるためには、礼拝や月会等の集会に参加し、会員申し込みを行い、役員面接の上、事務会に諮って承認されることが必要である。伝道集会等の宣教活動は特に行っていないが、自分たちの礼拝や諸活動について人々に説明するための公式の集会を時々開催している。(G. A. Barnes 氏質問紙調査と「ユートピアの挑戦」4頁参照)

フィラデルフィアのクエーカー教徒達は、重要事項を決めるとき、充分時間を取り、反対意見が出なくなるまで議論を行い、私は異論を持つが、この決定には反対しないというようになるまで議論を尽くし、多数決のような方法は決して行わないのである。これが、少数意見を尊重するクエーカー流の民主主義的方法なのである。クエーカーの集会は、いくつかの委員会に分かれており、委員会ごとに決めてきたことをリーダーが代表して全体集会で発表し、そこで議論を行って物事を決定しているのである。それぞれの委員会のリーダーが優れた資質の持ち主であるからそれが可能となるのである。(嶋田高司、195-205頁参照)

クエーカーの集会では、牧師は存在せず、皆が牧師の役目を務めている。ここでは、万人が牧師なのである。聖書の講読も讃美歌もなく、ただ、神の御霊を待望して、人は沈黙して聖霊が語りかけるのを待つのである。彼らの経験によれば、被造物が沈黙するときのみ、深い静けさの中で神の御霊の働きかけが行われるのである。クエーカーの集会では、ただ、この御霊の働きかけを待望し、それが得られるまで沈黙して待つのである。

筆者の体験では、その集会は、40分くらいの沈黙の時があり、その後一人の人が発言し、続けて4人が発言を行ってその集会は終了となったのである。クエーカーの人達の話し合いでは、議論がつきるまで議論するので、その意思決定には多大の時間を要するが、それでも彼らはこうした方法を貫いてきているのである。

このクエーカーの意思決定の方法は、宮本常一の『忘れられた日本人』の中の「対馬にて」の章に出てくる「村の寄り合い」の意思決定の方法を連想させるものである。対馬の寄り合いの場合も、議論が尽きるまで話し合いをするので、クエーカーと同様、何日間もの多大の時間を要するのである。ただ、対馬の場合には、最後に最高責任者に決をとらせている。この点が、決をとらないクエーカーの意思決定とは違う点なのである。(宮本常一、『忘れられた日本人』、11-21頁、宮本常一、『庶民の発見』、120-137頁参照)

この全員による協同一致の意思決定が行われないと、村の運営に支障が出てくるのである。例えば、害虫の駆除をするとき、一軒でもこれに従わない場合、害虫駆除ができなくなるからである。協同一致の意思決定に基づく村人同士の相互扶助活動が、村の共同体を支えているのである。川や海の利用等に関わる問題の解決のために、一村を越えた村連合や漁村連合による話し合いが行われる場合もあり、この場合には、協同一致の意思決定に基づく相互扶助活動は、村落連合体や漁村連合体へと拡張され、地域連合活動になっていくのである。(宮本常一、『庶民の発見』、120-137頁参照)

次に、クエーカーの実践活動の事例として、スコット・バーダー方式という協同組合型の会社を設立したアーネスト・バーダーと労働者の福祉という視点に立ち、福祉労働型の会社を設立し、社会改革運動にも従事したジョーセフ・ラウントリーという二人の実業家について述べてみよう。

先ず最初に、アーネスト・バーダーについて取り上げてみよう。クエーカー教徒のアーネスト・バーダーは、1920年、30歳の時、ロンドンとオックスフォードの中間の農村ワラストンにある元荘園の18ヘクタールを入手して、ポリエステル樹脂加工会社を100パーセント個人株主の私企業として設立した。第2次大戦後、公園のベンチやボートなどの中堅メーカーに成長したが、アーネスト・バーダーは誠実なクエーカー教徒として平和運動に熱心に関わった。また彼は、1951年、この成功企業をパートナーである従業員の共同所有企業体に変換すること

を決心し、その方法として、会社の株を共同所有する別組織、「スコット・ベダー・コモンウェルス」を設立し、それに個人の株式を委譲した。そして企業の経営管理を従業員労働者に委譲した。

コモンウェルスは、狭義では、スコット・ベダー社を所有し統治する会社である。しかし、広義では、コモンウェルスは理想を実現しようとしている共同体で、従来の会社に存在する所有者、経営者、労働者の分離のない、相互信頼と協同による労働共同体というビジョンを持った概念である。これは、ロバート・オーエンやロッチデールの労働者達が目指したものを実現しようとするための概念なのである。(『第四世代の協同組合論』、127-128頁。)

このアーネスト・ベダーの思想について、E・F・シュマッハーは、以下の様に説明している。

若いとき、彼は従業員としての一生の見通しに深く不満足だった。「労働市場」や「賃金制度」という考え方に憤りをおぼえ、特に人間が資本を使う代わりに資本が人間を使うという考え方に腹を立ててきた。今、自分が雇い主の地位に立っても、彼は自分の成功と繁栄が、自分だけではなく、協力者全員の成果であることも忘れなかった。彼自身の言葉を引用すると、「私が大決心をして、雇われる身分をやめた一年前、私は人々を管理される人と経営する人に分ける資本主義的な哲学に反対していることに気づいた。しかし、真の障害は、株主の独裁的権力と株主が支配している経営階級組織についての条項を持つ会社法である。」

ベダーは次の二つのことがなければ、決定的な変化が起こらないと直ちに悟った。

第1は所有権の変化であり、第2はある種の自己否定的な布告の自発的な受け入れである。第1のことを達成するために、スコット・ベダー・コモンウェルスを設立し、同社に彼の会社、スコット・ベダー・カンパニー・リミテッドの所有権を移した。第2にこのことを実施するために、彼は新パートナー、つまりかつて従業員だったコモンウェルズ社の社員と、私有権に含まれる「権力群」の配分を規定するだけでなく、会社の行動の自由を次のように規制する「社内規約」を作ることに同意した。

第1に、会社は社員の誰もが自分の心や想像の中に抱くことができるような規模の限られた企業でなければならない。その規模は、350人程度でなければならない。もし、環境がこの限度を超えた成長を求めるようであれば、スコット・ベダー・コモンウェルスの方針に沿っ

た新しい完全に独立した組織体を作ることを助ける。

第2に、組織内の仕事の報酬は、年齢、性別、役職、経験などにかかわらず、最低のものと最高のものの差が税引き前で1対7の範囲を越えない。

第3に、コモンウェルスの社員は従業員ではなく、パートナーであるため、大きな個人的不行跡以外は、どんな理由でも共同パートナーによって免職されることはあり得ない。もちろん、どんなときでも、しかるべく通告をして、自発的にやめることはできる。

第4に、スコット・ベダー・カンパニー・リミテッドの取締役会はコモンウェルスに対して十分な責任を負う。社内規約で定められた規則に従って、コモンウェルスは取締役の任命の追認、撤回、報酬の水準に関する同意の権利・義務を持つ。

第5に、スコット・ベダー・カンパニー・リミテッドの純益の40パーセントまではコモンウェルスに所有され—最小限60パーセントは税金、自己資金のため留保される—コモンウェルスは所有した利益の半分を社内で働く人々のボーナス支払いに、残りの半分はスコット・ベダーの組織外の慈善的目的に当てられる。

最後に、スコット・ベダー・カンパニー・リミテッドの製品は戦争に関連した目的のために使うことで知られている顧客には売らない。(『人間復興の経済』、208-209頁。)

以上のように、スコット・ベダー方式協同組合企業では、企業の資本は共同所有であって、その労働者の出資金による資本造成はなく、剰余金の内部留保による積み立てだけである。剰余金のうち組織外の慈善目的に充てる資金の配分は、外部の学識経験者に委任した。シュマッハーはその一員であった。(『第四世代の協同組合論』、130頁。)

アーネスト・ベダーの設立したこの協同組合企業の規約には、「戦争を目的とした顧客には製品を売らない。」という条項があるが、この条項の中に、キリスト教平和主義を信条とするクエーカーの思想が良く現れている。

次に、ジョーセフ・ラウントリーについて見てみることにしよう。

ジョーセフ・ラウントリーは、イギリスのラウントリー社の創立者である。ラウントリー社は、ココアやチョコレート等の菓子製造会社である。彼の名前は、彼の経済事業の他に、禁酒運動、住宅村建設、3トラスト(公益信託)の設立で知られている。貧困問題等の社会問題

の解決を目指して社会改良事業に積極的に関わった人なのである。この社会問題への関心は、彼の児童期に彼の父が彼をアイルランドへ連れて行き、そこで、飢饉のため餓死していく人々の状況を目撃したからであった。この体験が、終生、彼を貧困等の社会問題に目を向けさせ、その原因とその解決のために尽力させたのである。彼の家系は代々敬虔なクエーカー教徒であり、彼はその薫陶を受けて育ったのである。彼は、質素・勤勉で、よく働き、教育熱心で、人目につかないように控えめに行動することを尊び、平和を愛し、社会正義を重んじ、社会改良に熱心な人であった。この資質は、クエーカーの思想とその教育の賜物なのである。

彼は、彼の宗派の活動では、教育担当であった。この教育は、教会学校のような聖書についての講話をすることも含まれているが、もっと広く成人教育担当であった。読み書きや図書館の使い方や貸与農業や貯蓄基金等を担当したのである。この教育は、クエーカー以外の人達に開放された教育事業であった。彼は、クエーカーの学校運営の仕事も引き受けたが、それ以外の公立の学校運営にも積極的に関わった人であった。

彼は、自分の経済事業においても、パートナーである従業員の福祉を大切に人であった。ラウントリー社の従業員とその家族も含めた年金保障制度の設立、図書館や運動場の建設、コンサートや懇親の夕べやクラブ等をいち早く取り入れたのである。また、会社内に医科及び歯科の施設を設置し、従業員が無料で診療を受けることができるようにした。

彼の工場が2000人規模になり、以前のように意思疎通が取りにくくなると、この集団のコミュニケーションを保つ手段として、「ココア工場マガジン」を発行した。そこには、その時々の方の工場のニュースが書かれていた。クラブや同好会の活動が定期的に報告され、職員の死亡、結婚、昇進などが掲載されていた。その他、書評、旅行日記、スコットの南極探検についての記事、郷土史などもあった。写真、詩、そして時には、シャーロック・ホームズやその他の有名な小説上の人物についての機知に富んだパロディーがあった。読者である従業員が退屈しないような工夫が施されていたのである。

また、会社に対する提案制度を設け、ココア工場マガジン誌にそれを掲載した。それは、以下のことについての提案であった。この提案に対しては、賞が提供された。

- (1) 商品の製造ないし梱包方法の改善、および商品の品質の改善に対して。

- (2) 製造ないし会社の行ういかなる仕事の遂行における、より早いあるいはより経済的な方法に対して。

- (3) 機械その他の改善に対して。

- (4) 仕事が行われる条件の改善に対して。

- (5) 会社と従業員の福利に関わるその他のこと。

彼は、会社から従業員と経営者による共同経営方式（パートナーシップ制）を導入するため、経営者と従業員が話し合う場である「工場評議会」を設置した。また、彼は、会社に上訴委員会を設置した。懲戒措置を受けた従業員がその措置に異議のある場合、この委員会に訴えることができるようにするためであった。これは正義を貫くためである。平和と共に正義を重んじるクエーカー教徒の彼にとって、誠に相応しい制度の提案であると言える。上訴委員会は5名で構成され、2人は労働者から選出され、2人は役員から指名され、委員長は他の4人によって共同に任命された人でなければならなかった。工場規則の違反、もしくは仕事の遂行に関わらない行動に対して取られた何らかの懲戒措置が不正義であると感じた従業員は、誰でもこの委員会に訴えることができたのである。

最後に、彼の社会事業について見てみよう。

まず最初に、禁酒問題について見てみよう。貧乏人の大酒を飲むことによる酩酊は、労働者としての効率を破壊した。これは産業にとって深刻な問題だった。この背景にある問題をジョーゼフは調査した。その一つは彼らの住宅問題であった。彼らの家は、一部屋で、全家族のみならず、台所、洗濯所、居間、寝室、育児室、また仕事部屋にも使わなければならない場所であり、とても友人を招いて夕べを過ごすことが出来る場所ではなかった。

彼らは、この狭い空間から抜けだし、パブで友人達と憩いたいのであった。もう一つは、彼らの仕事場は、絶え間なき騒音、有害な熱、ほこりだらけの空気という劣悪な条件下にあった。また、機械処理による作業のため、神経的な緊張と極度の単調さがあった。これからの息抜き場として、パブは彼らにとって魅力だったのである。彼は、パブに代わる憩いの場として、美術館、コンサート・ホール、ウィンター・ガーデンなどを組み合わせた場所である「人民宮殿」を提案した。

上述したように、貧民がパブに行き酩酊する原因の一つとして、彼らの家があまりに狭く、友人を招いて夕べを共にする憩いの場にならないことだった。これに対する対策として、貧民のために低価格で良質な住宅を提供

できることを目的にした住宅村建設運動を彼は推進した。この村は、現在では、ニュー・イヤーズウィックと呼ばれている。その発展過程で、この村は、低所得者ばかりでなく、中所得者や高所得者まで含む多様な層のニーズに対応した住宅村になったのである。

彼は、社会問題の原因を追究する基礎研究や住宅村建設等の社会改良事業のために資金を提供する目的で、3つのトラスト（公益信託）を設立した。これは、単なる慈善事業の枠を越える面を持っていた。

その一つは、ジョーゼフ・ラウントリー・ヴィレッジ・トラストである。1904年、ニュー・イヤーズウィック村住宅建設のため創立されたチャリティ組織である。1959年、目的が調査と開発を含むものへと拡張された。1968年には、名称がジョーゼフ・ラウントリー・ハウジング・トラストとなり、1990年には、再度名称変更し、ジョーゼフ・ラウントリー財団となった。これはチャリティ組織である、社会事業団体である。二つ目は、ジョーゼフ・ラウントリー・チャリタブル・トラストである。1904年に創設されたチャリティ組織で、社会調査、成人教育、クエーカー事業の助成を目的として発足したトラストである。このトラストは、平和活動・人種的な公平・民主主義の推進・アイルランド問題・南アフリカ問題・貧困と経済的正義・企業の責任・クエーカー関係事項の領域に助成を行っている。毎年、この目的のために、約400万ポンドの資金を助成している。3つ目は、ジョーゼフ・ラウントリー・ソーシャル・サービス・トラストである。2つ目のトラストと同じく、1904年に創立されたトラストである。このトラストは、民主主義体制下での社会改良を目的としている。具体的には、例えば、当時あった貴族院の廃止などの政治的な目的を持った活動を志向している。その意味で、このトラストはチャリティ組織ではないのである。1990年名称変更し、ジョーゼフ・ラウントリー・リフォーム・トラストになった。（『ジョーゼフ・ラウントリーの生涯』、3-28頁、102-199頁、209-224頁参照。）(KAWAKAMI, Shuzo・専修大学人間科学部教授)

参考文献

Ram A. Cnaan, with Stephanie C. Boddie, Charlene C. McGrew, and Jennifer J. Kang, 2006, *The Other Philadelphia Story: How Local Congregations Support Quality of Life in Urban America*, University of Pennsylvania

Press.

Donald B. Kraybill, Photographs by Daniel Rodriguez, 2008, *The Amish of Lancaster County*, Published by StackpoleBooks.

Edited by John Andrew Gallery, Photographs by Tom Crane, 2007, *Sacred Sites of Center City: A guide to Philadelphia's historic churches, synagogues and meeting houses*, PAUL DRY BOOKS, INC. Philadelphia.

Essays by John Andrew Gallery, 2007, *The Planning of Center City Philadelphia: from William Penn to the Present*, The Center for Architecture, Inc. Philadelphia.

John A. Moretta, 2007, *William Penn and the Quaker Legacy*, Pearson Education, Inc.

Douglas Root, Photography by Jerry Irwin, 2003, *Compass American Guides: Pennsylvania*, Compass American Guides Animprint of Forders Travel Publication.

Roger W. Moss, Photographs by Tom Crane, 2005, *Historic Sacred Places Philadelphia*, University of Pennsylvania Press.

石見 尚, 2002年, 『第四世代の協同組合論』, 論創社。

ドナルド・B・クレイビル/スティーブン・M・ノルト/デウィッド・L・ウィーバー・ザーカー, 青木 玲訳, 2008年, 『アーミッシュの赦し—なぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』, 亜紀書房。

監修 James W. Baker 文 志茂望信 写真 Plimoth Plantation, Inc., 2000年, 『メイフラワー号プリマス開拓村』, 燦葉出版社。

坂井信生, 2007年, 『聖なる共同体の人々』, 九州大学出版会。

嶋田高司, 2008年, 『成功の主役は「脇役」だった—私のアメリカン・ドリーム』, 早稲田出版。

E・F・シュマツハー, 斎藤志郎訳, 1976年, 『人間復興の経済』, 佑学社。

アン・ヴァーノン, 岡村東洋光・佐伯岩夫訳, 2006年, 『ジョーゼフ・ラウントリーの生涯—あるクエーカー実業家のなしたフィランソピー』, 創元社。

藤井隆至, 2008年, 『柳田国男—『産業組合』と『遠野物語』のあいだ』, 日本経済評論社。

ヴァイニング夫人著, 高橋たね訳, 昭和25年, 『民主主義の先駆者 ウィリアム・ペン』, 岩波新書。

宮本常一, 2007年, 『庶民の発見』, 講談社学術文庫。

宮本常一, 2009年, 『忘れられた日本人』, 岩波文庫。

C・ダグラス・ラミス, 2009年, 『ガンジーの危険な平和憲法案』, 集英社新書。

「ユートピアの挑戦」(<http://www.geocities.co.jp/berkeley/3860/Utopia/040.html>)

川上周三 KAWAKAMI, Shuzo 専修大学人間科学部教授